

# 「主は羊飼い」

詩編23篇1－6節

森島 恵 牧師

礼拝は、主にあつての喜びをみんなで分かち合うシャロームの心をもってささげるものです。御言葉を聞いて礼拝を喜び楽しむ、そして声高らかに賛美をささげる、これが礼拝です。

今日、与えられました御言葉は詩編23篇です。

詩編23篇は「主は羊飼い、わたしは何も欠けることがない。」(23:1)と始まります。主とは神さまのことで、「主はわたしを青草の原に休ませ 憩いの水のほとりに伴い 魂を生き返らせてくださる。(23:2—3)」と詩人は続けます。最初の言葉「主は羊飼い、わたしは何も欠けることがない」は、羊飼いに養われる羊の姿をイメージできます。神さまに信頼することの喜びと平安は他のものによっては決して与えられることのないものであることを明らかに謳っています。

この詩に私たちは今まで幾度心震わせ、慰めを得たことでしょうか。この詩がこんなにも私たちの心を捉えるのは何故なのでしょう。おそらく主イエスも愛されたであろうこの詩を深く味わう時、詩編全体を貫いている<愛そのものである神様>と<私たち>の関係が、この一節に言い尽くされていることに気づかされます。杖を振り上げて襲ってくる獣を追い払う羊飼いは、どんな危険をも厭わない。それは愛の神様の姿です。多くの痛みを引きずって崩れそうな人を生き返らせてくださることを教える旧約詩人の言葉です。私たちは主イエスの地上の御生涯については福音書を通して知っていますが、この主イエスを遣わされた神様を忘れてはなりません。

羊は臆病で、一度道に迷うと戻って来ることができないといわれています。私たちが羊と同じ弱い存在であることを思えば、神様の御心を取次がれた主イエス・キリストこそ、私たちの牧者であると告白せざるを得ません。主イエスは99匹の羊を残して、迷い出た1匹の羊を探しに行く羊飼いのたとえ話を語っておられます。私たちの人生はみんな違っていますが、神様は一人一人に愛を注ぎ、聖書の御言葉を通して支えて下さるのです。

私は昨年、命にかかわる大病をしました。大手術を経て生かされ過ごす日々の中で、御言葉の一つ一つが胸に染み渡りました。私たちが心を開いて、与えられた御言葉を深く味わう時、長い歴史の中で語り継がれた聖書の御言葉はキリスト者を育て、キリストを信ずる群れを今もなお生かして下さっていることに思い至り、只ならぬ気持ちを新たにされます。そして、この詩を書いた詩人と思いを同じくする私たちは、牧者である真の神様を信頼することの喜びと平安を与えられ、新しい一步を踏み出すことができるのです。

パウロはローマの信徒への手紙で「神を愛する者たち、つまり、御計画に従って召された者たちには、万事が益となるように共に働くということを、わたしたちは知っています。」(ローマ書8:28)と記しています。私たちは神様の恵みによって信仰に導き入れられた者です。人生にはいろんなことがあるでしょう。でも大丈夫です。神様によって導き入れられたキリストの教会の中で、神様が生きて働いておられることを信ずる信仰者の群れの中で、神様はあなたに必要なことのすべてを与えてくれます。

詩編23篇は「死の陰の谷を行くときも わたしは災いを恐れぬ。あなたがわたしと共にいてくださる。あなたの鞭、あなたの杖 それがわたしを力づける。」(23:4)と続いています。魂と肉体のすべてを司ってくださる神さまが悲しみの時も苦しみの時も私たちのために戦ってくださるのです。信仰をしっかりと持ち、安らかに息を引きとるその時まで、何者も神様の恵みと慈しみから私たちを引き離すことはできません。神様から大きな慰めと勇気をいただく私たちです。どんなことがあっても神様を信じる私たちは、何も恐れることは無いのです。

(説教要約 羽入田悦子)